

同志社大学と京田辺市との社会教育のあり方について

ページ

I テーマ

・・・ 2

- 1 地域に根差した大学、学びが溢れるまち
- 2 地域や学校行事などを学生と共に盛り上げよう！
- 3 京田辺歴史散歩
- 4 Win-Winの関係づくり
- 5 市全体を大学のプレ・インターンシップの場ととらえ、全市民の知的好奇心をレベルアップさせる学びの種をまく。
- 6 同志社大学との地域連携～文化活動を通して～
- 7 学生が地域の状況を知り関わることで実践的な学びを

II 提案

・・・ 4

- 1 学生の社会課題解決 ・・・ 4
 - ① 地域の社会課題解決テーマを学生チームで担当
 - ② 自治会の活性化アイデア企画
 - ③ 学生と市民との交流、まちづくり参画とのマッチング、ガイドライン作成
 - ④ 子育てイベントへの参加、子どもと大人のつなぎ役など
 - ⑤ 地域おこし活動など実践的な学びを実施
- 2 学生による講座 ・・・ 6
 - ① 学校カリキュラム内での出前授業、講義体験、幼児引率など
 - ② 留学生による出身国紹介、英語講座など
 - ③ 放課後子ども教室への学生協力
- 3 大学の協力 ・・・ 7
 - ① 学生の募集、割当を行う組織を大学内に開設
 - ② 大学ホームページ、校内ポスターなどボランティアイベント参加をあっせん
 - ③ インセンティブ（単位認定、学内表彰等）
 - ④ 学生へ市からの実費支援
- 4 市民向け講座 ・・・ 8
 - ① 既存講座、学生向け特別講座の市民への公開を制度化
 - ② 子育て世代向けの発達心理学や学校心理学講座
 - ③ 生涯学習を推進する市民講座開設（オンライン併用）
 - ④ 京田辺歴史散歩

III その他のご意見

・・・ 10

- ① 協議会の設置
- ② 連携事業の精査と市民が希望する事業の立案
- ③ 現在のつながりを継続
- ④ 連携事業の広報と結果や成果を求めない交流機会や支援機会の積重ね

I テーマ

1	地域に根差した大学、学びが溢れるまち
	同志社大学と京田辺市はこれまでも長きにわたり連携を深めてきた。地域に根差した大学、学びが溢れる街の実現を目指し、さらなる連携を深めていきたい。
2	地域や学校行事などを学生と共に盛り上げよう！
	少子高齢化、コロナ禍の影響などから人のつながりが希薄になり、自治会未加入や子ども会不参加が目立つ昨今。災害にも欠かせない人のつながりや地域力は高める必要がある。
3	京田辺歴史散歩
	京田辺市と同志社大学との接点として、やはりこの地に共存しているということが重要なポイントだと感じている。京田辺市は縄文時代から続く長い歴史がある地域で、縁があり京田辺市に学問の府である同志社大学が来られた訳なので、この歴史と学問を介して交流が深まればと思う。 個別の具体的な連携を深めるのも大切なことだと思う。
4	W i n－W i nの関係づくり
	京田辺市と同志社大学の協力関係は、何をすればよいか分からない市民や学生も多い。そのためのマッチングをするコーディネーターを発掘することが必要で、市民と学生がお互いにW i n－W i nの関係を築くことが大事だと考える。

5	市全体を大学のプレ・インターンシップの場ととらえ、全市民の知的好奇心をレベルアップさせる学びの種をまく。
	大学は学生と市のマッチングを担い、市民の学びの場所を提供する。 市は学生が社会に出る前のプレ・インターンシップとして、発表機会・教える経験を提供する。 子ども達は学生から学び、将来の自分の姿を想像する。 その他親世代は子どもをとおし、子どもと話すきっかけとする。
6	同志社大学との地域連携～文化活動を通して～
	同志社大学と京田辺市には、学生が地域のお祭やイベントの担い手としてボランティアで参加することを奨励するような仕組みを作って欲しい。
7	学生が地域の状況を知り関わることで実践的な学びを
	持続可能な地域社会の構築に向けた政策形成を大学の授業、課外活動で実践して欲しい。

II 提案

1 学生の社会課題解決

①	地域の社会課題解決テーマを学生チームで担当 近年、現役世代を中心とした若い世代と地域の関わりが希薄になっている。一方、若い時期の社会活動経験は、その後の人生の価値観や視野視点に大きな影響を与える。 社会に出る前に、地域の住民や社会課題に触れ活動することは、学生にとっては大きな意義があると考ええる。継続的に学生と地域が関わる機会が提供できれば良い。 直接地域住民と触れ合い、課題を設定し、そこから対策を生み出し実践する等、単発ボランティアでは得られない、より高い次元の社会活動を行うことで社会活動マインドの醸成に繋げたい。 市内には、高齢者の生活、子育て、放棄農地、自治会活動の希薄化等、学生にとって手を付けやすい課題も多い。 活動は、個人ごとの活動でも良いが、チームを形成し、協議しながら楽しみながら社会活動に取り組む方が、協働力を高めるとともに、活動の敷居も下げられると考える。 彼らが学生時代を過ごしたこのまちを、関わった地域を、生涯故郷のように感じてもらえれば光栄である。
②	自治会の活性化アイデア企画 自治会が学生の力を借りて協働し、活性化を目指すには、どうしてももらいたいかを考えて示してもらう。 学生には、京田辺市だけでなく全国的な社会問題である少子高齢化、地域力低下の解決に向けて何かできないかを考えてもらい、地域に力を貸してもらう。その際には単位として認めてもらう。 学生にどの地域に行って欲しいのか、何をするか（会議出席、お祭り等の行事を企画等）など、最初は市がコーディネートしていく。
③	学生と市民との交流、まちづくり参画とのマッチング、ガイドライン作成 京田辺市や市民団体と同志社大学の間には、今までにも多くの協力関係が生まれています。例えば、きょうたなべ政策グランプリ JAPAN（市のまちづくりの提案）や KDSC（京たなべ・同志社スポーツクラブ）、子ども食堂への学生の参加、同志社女子大学と市議会のきららちゃん議会の開催等で交流はできているが、まだまだ市民や区・自治会との交流は少ない。

	大学や学生側は、市民との交流やまちづくりへの参画で授業や人間形成に役立つとの考え方があると思われますが、何をすればよいのか分からない、市民、区・自治会も大学や学生に何をして欲しいのか、どのような依頼をすればよいのか分からないことが根底にあると思われる。 そのためのマッチングが重要であり、何らかのガイドライン的なものが必要であると考え。
④	子育てイベントへの参加、子どもと大人のつなぎ役など 平日に子どもが学校内で学生と交流することで、新しい学びがあり、それを保護者に話すことで、自身は大学とつながらなくても子どもと話すきっかけになる。 幼稚園児や小学生向けのキャンパスツアーで子ども達に具体的な将来の姿を想像させることで、学ぶ意欲を向上させる。 広い敷地内で親子の自然観察会（敷地内を散策して植物や虫などを観察する。）、ハリス理化学研究所柵助教による子ども向けフィールドワークや講演、市内幼稚園などへ大学生による出前講座（簡単な科学ショー、体を一緒に動かす遊び）を行う。
⑤	地域おこし活動など実践的な学びを実施 大学や高校との連携事業は既に実施している。 近年、地域の高齢化が進み、自治会の役員や民生委員のなり手不足、活動の収縮、地域の衰退等様々な問題が山積している。 学生が地域の状況を知り関わることで、実践的な学びができないかなと思う。 学生に地域の課題解決、地域おこし活動に参加してもらい、京田辺市だけでなく全国的な高齢化社会の将来を考えて欲しい。 持続可能な地域社会の構築に向けた政策形成を大学の授業、課外活動で実践して欲しい。 さらに若い人々が地域の自治活動に参加してくれることによって、将来的に彼らが積極的に自治活動に参加する地盤を作ることが重要だと考える。

2 学生による講座

①	学校カリキュラム内での出前授業、講義体験、幼児引率など
	おかえり先輩プロジェクトとして、市内出身の先輩を探して、母校で話をしてもらう。 学生が社会に出る前のプレ・インターンシップとして、幼稚園、小中学校への出前講座（集中力を失いかけたときにやるといい運動、眠気に効く運動、心のバランスを壊しやすい思春期に乗り越えてきた経験談、心理学の学問的観測からのアプローチも含めた座談会、走り方講座、科学実験ショー、健康な体を作るための栄養学、簡単に効果的な筋トレ法等）として発表の経験や教える経験を提供してもらう。
②	留学生による出身国紹介、英語講座など
	留学生が小中学校で出身国紹介を行うことで異文化を知り、小中学生が日本について考えるきっかけにする。 幼児から参加できる親子の簡単な英語プログラムを定期開催する。
③	放課後子ども教室への学生協力
	放課後子ども教室での学生の活躍を期待したい。

3 大学の協力

①	学生の募集、割当を行う組織を大学内に開設
	学生の社会活動(Social Work)機会提供について、特定のゼミの研究テーマとして活動するのも良いし、学内で運営を組織化し、全学生が自由参加できる活動でも良い。継続的に学生と地域がかかわる機会が提供できれば良い。 学生の地域活動に協力できるよう、大学内で学生の募集、割当を行えるよう運営を組織化し、開設する。
②	大学ホームページ、校内ポスターなどボランティアイベント参加をあっせん
	大学に地域のお祭りや文化イベントを紹介したり、ボランティアの募集をしたりする告知・案内スペースの設置してもらう。 (市内文化イベントの情報提供は、京田辺市文化協会が担う。)
③	インセンティブ（単位認定、学内表彰等）
	大学に学生が地域のお祭りや文化イベントに参加するためのインセンティブ（単位認定、学長表彰等）を用意してもらう。
④	学生へ市からの実費支援
	市に地域活動の主催者に地域活動に参加した学生に交通費を支給することができる補助金を用意し、学生が地域活動に参加しやすくなる仕組みづくりを考える。

4 市民向け講座

①	既存講座、学生向け特別講座の市民への公開を制度化 ヒューマンカレッジは、広く一般市民を対象として学習機会が得られてきた。しかし最近では、現役世代から高齢者までの様々な世代において、幅広い専門知識やリスキリングが求められている。多様な個人ニーズに応じて、より自由に専門知識を得る環境の提供を目指す。既存の学生向けの講座でも良いし、最近話題の内容（生成A I、異常気象、自動運転、宇宙開発、世界経済、世界情勢等）を扱った特別講座でも良い。一般市民が大学を通じて学びを得る機会の提供を制度化することで、市民の学習意欲の向上につなげ、生涯学習マインドの醸成に貢献したい。 学生と市民が肩を並べての受講や何らかの協働ができれば、世代間の交流機会にもなる。 市民の能動的な学びや経験が、学生に対しても良い刺激となれば光栄である。
②	子育て世代向けの発達心理学や学校心理学講座 親は発達心理学や学校心理学等を学ぶ講座を受講し、子ども（親と離れられる年齢）は別室で学生と（心理）ゲーム等で遊ぶ。
③	生涯学習を推進する市民講座開設（オンライン併用） 京田辺市には同志社大学という大きな強みがあり、市民への社会教育も、大学との連携強化がさらに良い効果をもたらすと考えます。 しかし、主体はあくまでも市であり、市民、未来を担う子供たちを地域で育むことが大切なのではないだろうか。 京田辺市として、社会教育においてどのような力を付けた市民が増えて欲しいか等により、大学との連携や講座の方向性も変わってきます。 同志社大学との関係を上手に活用できるプランの策定と、市民のニーズにあわせた講座の参加から、社会教育の充実につなげてみてはどうか。今は、Zoom 等の受講も可能であり、さらに展望が期待できる。 人が変わっても継続して実施できるようなプランニングと啓発の継続事業とする。事業もブラッシュアップしながら、さらに良いものへと変えていくことが大切だと考える。

④

京田辺歴史散歩

学問の府である同志社大学が京田辺市にあるので、歴史と学問を通して交流が深まれば良い。

同志社大学京田辺キャンパスには歴史資料館があり、天神山遺跡の出土品を展示されている。また、今出川キャンパスでは、1月～2月に展覧会「京田辺と同志社－考古学の世界から－」が開催されている。

一方、中央公民館展示室でも1月～2月に企画展「京田辺市の発掘成果展」(2015～2024)が開催された。

同志社大学の企画展示には、それに関わる専門の教授がいるだろうし、京田辺市の企画展には文化財担当の市職員が尽力されていると思う。

京田辺市の歴史を探訪する機会が、市、市民、大学、学生を含めて深くなれば有意義な連携になるのではないか。

「京田辺歴史散歩」として遺跡や古墳、神社仏閣などと大学の専門分野の先生、学生、文化財担当の市職員、市民が共に巡り、現地で解説を受けたり、市や大学の施設で講義を受けたり、交流できれば良いと考える。

もう一歩進めてワークショップやシンポジウムなどの開催もできればより良い。

学ぶのは遺跡や古墳などの古代だけとは限らず、市内唯一の国宝の十一面観音像を安置する大御堂観音寺や重要文化財の酬恩庵(一休寺)はじめ歴史的な神社仏閣、名所、旧跡は枚挙にいとまがない。

また、京田辺市の歴史的な成り立ち、変遷を学ぶのも未来に向けて意義深いことだと感じる。

温故知新、古きを共に学ぶことでこれからの京田辺市を考える地に足がついた交流が深まればと思う。

Ⅲ その他のご意見

①	協議会の設置
	同志社大学の組織、また、全体像についての情報量が足りないので、その点を明確にして欲しい。 その上で、市全体として何をしていくかを議論集約して、市が関与して協議会を設置する。 そこでお互いが進むべき対策を一つ一つ検討し、課題解決のために一つ一つ検討して答えを出していく。
②	連携事業の精査と市民が希望する事業の立案
③	現在のつながりを継続
	「京たなべ・同志社ヒューマンカレッジ」や「京たなべ・同志社スポーツクラブ」など規模の大きな事業が長年継続されていることは意義深いこと。 また、夏休みに開催される「京田辺・同志社サイエンスアカデミー」や秋の「同志社クロバー祭」なども、大学と市民のつながりの中で運営する恒例行事として定着している。今後もこれらの行事を市民に周知し、活用して欲しい。

④	連携事業の広報と結果や成果を求めない交流機会や支援機会の積み重ね 大学が社会教育分野で地域と連携協働する際、一般的に言えば、施設開放や公開講座等の大学拡張・開放の展開が考えられる。 高等教育機関である大学の教育施設・設備や研究教育機能は、まずもって教員の研究活動や学生の教育活動のためにあることは言うまでもないが、地域に根差した大学の展開を考えると、ハード面、ソフト面での大学拡張・開放から一歩二歩と進むことが期待されている。 せっかく個々の連携があるわけなので、そうした連携による展開が可能であることを大学と市民に広く知ってもらふ広報等の一層の充実が求められるのではないか。 また、何をするにせよ拙速に双方のメリットを求めることは難しいため、既に展開している個々の連携のプラス面と抱える課題について検証することや双方が求めていることを丁寧にピックアップし、その実現や課題克服のために必要な条件や方法は何かを考えることが大事だと思う。 そのためには、結果や成果を急いで求めない交流機会を意識的に設けたり、支援したりする小さな積み重ねが必要ではなかろうかと思う。
⑤	これまでの連携の一部は確実に根付いている。 これまでも京田辺市と同志社大学・同志社女子大学との連携は行われてきており、その内容については不十分であるとか、散発的で持続性に欠けるとかの類の批判はあるとは思いますが、一部確実に根付いているものもある。 また、現市長が同志社大学出身なので、これまで以上に連携は進んでいるように感じる。 この認識に立つと、社会教育委員会議で同志社大学にどのような要望ができるのかは大変難しい。